

研究の主題は、学校におけるジェンダー問題の実証的理論的研究である。具体的には、第一に、高校生と大学生への質問紙調査による実証研究と関係する先行文献研究により、「ジェンダー（社会的・文化的に形成される性別）」の実態を明らかにする。第二に、調査で明らかになったジェンダーバイアスの社会的背景を考察し、少子高齢人口減少社会における学校教育及び社会科教育のあり方について研究していきたい。

学校教育におけるジェンダー問題については、一九六〇年代から活発に議論されてきたが、近年あまり表立って論議されなくなってきたといわれる。その理由として、日野玲子氏は、学校教育において男女混合名簿などの「ジェンダーフリー教育」が実践化されたことを挙げる。他方で、「男女更衣室を一緒にしてしまうなどトンデモ・ジェンダーフリー教育」と揶揄した表現が新聞に掲載されるなど、〈ジェンダー・フリー〉教育に批判の声も高くなる。その結果、学校教育において「ジェンダー」すら語りにくい状況が生じた¹⁾。しかし、「二十一世紀の現在においても、日本社会で女性が引き受けざるを得ない不利益は厳然と存在している」²⁾との指摘のもと、新たな観点による研究も試みられるようになった。

卒業研究では、このような現状認識を踏まえて冒頭に述べた実証調査と理論研究により、次の二点を考察する。

① 質問紙調査により高校生と大学生のジェンダーバイアスの相違点を明らかにする。

② 文献研究により「隠されたカリキュラム」の観点からジェンダーバイアスの形成過程を考察する。

①については、高校と大学の間、高校と高校の間、大学と大学の間、そしてそれぞれの男女の間におけるジェンダーバイアスの類似点と相違点について明らかにする。すでに二〇〇九年十一月に、* * 県内の高校四校、大学二校、七八五名を対象に質問紙調査を実施し、その集計・分析から次の傾向を把握した。女子の場合は、高校生よりも大学生の方が、また高校における職業科よりも普通科の方が、専業主婦よりも共働きを望む割合が高い。男子の場合は、高校と大学のいずれの分類も、妻が専業主婦であることを望む割合が高い。

②については、学校教育における「隠されたカリキュラム」の先行研究の中から、特にジェンダーバイアスの再生産に関する研究に注目して行う。その一例をあげれば、一九七〇年代に、潜在的すなわち暗黙のうちに共有された「隠れたカリキュラム」に関心が高まり、授業内で展開される顕在的カリキュラムと異なり、学級経営や学校行事における慣習などさまざまなチャンネルを通じて伝達されることが明らかになった。さらにその後、研

究が積み重ねられ、新たに教師文化のなかにもジェンダーバイアスを再生産する「隠れたカリキュラム」が組み込まれていることが実証的に確認された^三。

大学院では、卒業研究での成果を基盤に、次の二つの仮説の実証を目的に、本格的な質問紙調査を実施し、その結果をふまえた社会科学教育の新たな課題を考察する。

① 学校教育は、表（顕在的）のカリキュラムではジェンダーバイアスの解消を目指す
が、裏（潜在的）のカリキュラムではジェンダーバイアスを再生産している。

② 女子における学力の高低と性別役割分業意識の高低は反比例の関係にある。すなわち、高校と大学の間、高校と高校の間、大学と大学の間、そしてそれぞれの男女の間におけるジェンダーバイアスの差というのは、学校で教えるカリキュラムとの負の相関関係を持っている、と見なせる。

すなわち、先に卒論の内容として言及したジェンダーバイアスについての質問紙調査の分析結果を敷衍させることにより、次のような仮説設定を行う。学力の高い生徒が選択するとされる普通科の女子の多くは、よりジェンダー平等（イクイテイ）な世界を志向し^三、社会的地位の高い自立可能な職に就く確率が高い。

一方、学力の低い生徒が選択するとされる職業科の女子の多くは、性別役割分業意識が高く、保育・美容サービスなど従来から女性職であった領域を希望し、将来については職業の中断・再就職型ライフコースを志向する^三など、結果的に社会的地位の高い自立可能な職に就く確率が低い。近年の事件が示唆するように、学力の低い女性は、よりジェンダーバイアスの強い世界にトラッキングされる確率が高い。

そのため女性の自立を高めるためには、学力の高低に係わらず性別役割分業意識を男女共に低下させる必要がある。

大学院では、まずこのような仮説の検証を実証調査によって試みる。さらに、その調査結果の分析をふまえて、学校教育とりわけ「公民的資質」の育成を目的とする社会科学教育が、学力の高低に係わらず性別役割分業意識を男女共に低下させるために必要な教育課程と授業実践の課題について考察する。

一 木村涼子『ジェンダー・フリー』教育を再考する」木村涼子編著『第十六巻 ジェンダーと教育』日本図書センター、二〇〇九年。

二 木村涼子『ジェンダーと教育 序論』、前掲書。

三 直井道子・村松泰子編『学校教育の中のジェンダー』日本評論社、二〇〇九年。